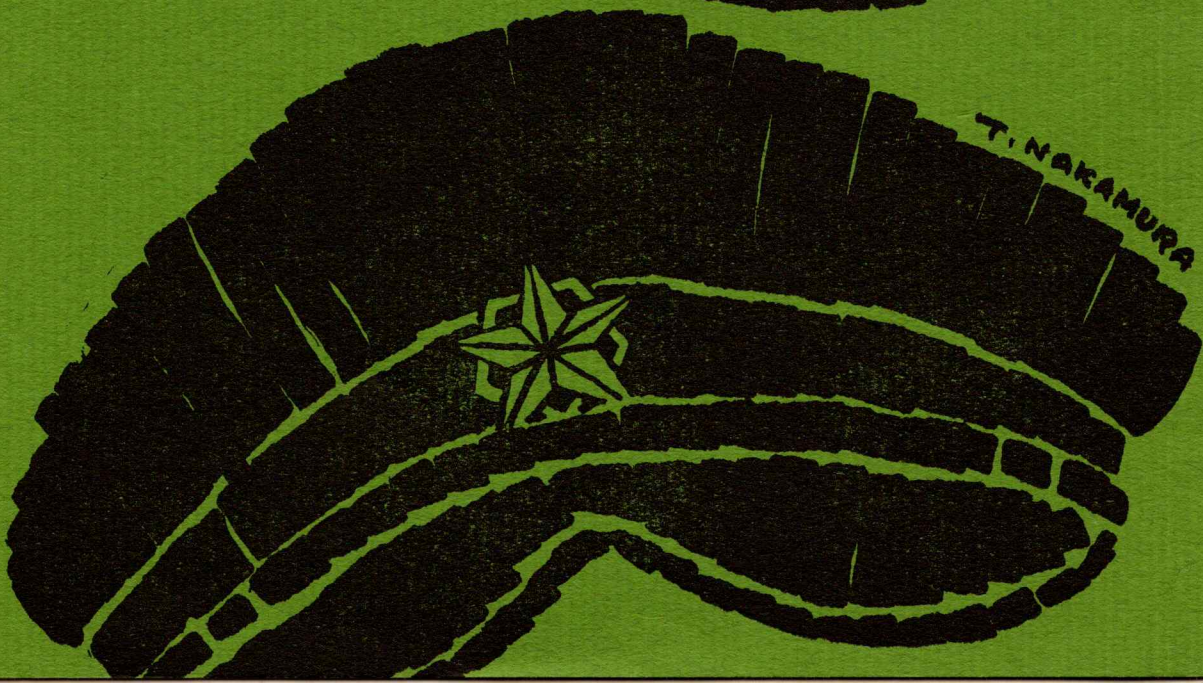


静 中・静 高
関 東 同 窓 会

会報3



巻頭のことば

会長 宮沢次郎

わたくしたちの関東同窓会も発足してから満二年になりました。この間、会の活動はおかげさまで大変盛んになりゴルフ会、魚釣会、麻雀会、観桜会などの懇親会も楽しく盛大に行われ、また同期生会、特に若い期のクラス会が活潑になって参りました。まことによきこばしい事と存じます。なつかしい級友と相語れば若き青春の心よみがえり、思ひ出多い校歌を合唱すればおのづから胸中澄みわたる、というようなことも、わが同窓会のもつ魅力と申せましょうか。

どうか、同窓のみなさまが一人でも多く、わが同窓会の活動にご協力下さいまして、この会がますます楽しく意義深いものに成長しますよう、心から希っております。

この会報もその意味でわたくしたちの心の広場として会員のみなさまに大いにご活用頂きますよう切望いたします。

ごあいさつ

校長 吉川晴夫

私は、過般の人事異動により、静岡高等学校長を命ぜられ、就任いたしました。

着任以来、一か月を経過いたしました。日を重ねるにつれて、永い歴史と伝統を持つ母校の校長という職責の重さが、ひとしお身に迫って来る思いがいたします。

もとより、浅学非才の我が身を顧みて、非分の重責と痛感しておりますが、与えられた使命に深く思いを致し、誠心誠意、全力を尽くす所存でございます。

何とぞ、格別の御指導を賜わりますよう御願ひ申し上げます。

同窓会関東支部は、発足以来、ますます、充実発展しつつあると伺っておりますが、これはひとえに、その推進力となっておられる先輩各位の並々ならぬ御努力と、全会員の一致となった御協力によるものと、心からの敬意を禁じ得ません。特に会報を拝見して、ひとしお、この感を深くいたしました。

大先輩の方々の寄稿にも、若手皆さんの同期会報告にも、まさしく、静中がそこに生き、静高がそ

こに躍動しています。心に染みる

片言隻句の中に、行間に潜む言外の言の中に、静中・静高の同窓生

であれば、無条件に感じ合える感動の何かがあるという実感は、やはり、輝かしい歴史と伝統の証であると感じました。私は、母校に職を奉ずる者の責任として、この感動の意味するものを、改めて、みずから問い直した上で、今の生徒たちに明確にこれを体得させたいと、心から念じております。

時あたかも、来年は創立百周年を迎えることになりました。この大きな歴史の節をいかに造るかということの責任はきわめて重大であります。そして、歴史と伝統を正しく継承するためには、その長い流れの上に立つ本校の現在を、まず、しっかりと見定めることから始めなければならぬと考えております。その上で、今でなければ造り得ない何かを、この大きな流れに加えなければなりません。

全校のすべての者が、真にその責任と使命を自覚し、一体となってこれに当たりたいと念願しております。

同窓の皆様方の力強い御協力と御鞭撻をお願い申し上げます。御部のいっそうの御発展を祈念して

ごあいさつといたします。

創立百周年

記念事業について

既に同窓会報或は同窓会の連絡等でご存じの事と思いますが、現状をまとめて見ますと次の様になって居ります。

実行組織として静岡県立静岡高等学校(静中・静高)創立百周年記念事業実行委員会という大変長い名前の、学校・同窓会・叩高会・PTA合同の委員会が出来て居り、会長に同窓会長、副会長に学

校長・叩高会長・PTA会長・同窓会の関東中部関西広域支部長がそれぞれなっております。

又、計画作成実行の為に総務・募金・行事の三委員会が設置され委員には同窓会広域支部からメンバーを出して居ります。

次に準備の状況ですが、事業としては

創立百年史編纂

本文二千頁写真三百枚及年表程度のもの。販価五千円の予定。

記念館建設

資料室を中心とする一三〇平米の軽量鉄骨コンクリート造、同窓会館の二階に接続する。五十年九月完成予定。

記念碑設置

叩高碑程度とする。

記念応援歌作成

歌詞は職員生徒及び一般より募集。作曲は専門家依頼とする。

行事としては

式典・講演会・慰霊祭

日時 十月七日十時—十一時半

場所 駿府会館

学校祭

招待試合(野球・バレー・バスケット)、資料展、叩高展

日時 十月七日十時—十五時

場所 学校

記念パーティー

日時 十月七日十五時四十五分

場所 駿府会館

市民サービス

N響公演

十月五日 駿府会館

チャリティバザー

未定

資金の状況

資金は同窓会・叩高会・PTAの寄附及び百年史収入その他で賄う事になって居ります。

同窓会の分担は五千万円で、募金の方法は同期会組織で実行する事とし、期別に責任額が割当てられて居ります。各地域支部は側面からの支援を行う事になって居ります。

以上が現在進んで居る状況の概略です。



続・「龍爪会」のこと

加 納 敏 (34回)

関東支部会報、創刊号の、「今昔の思い出の記」のなかに「龍爪会のこと」と題して、岡本敏興氏(32回)が一文を寄せられているのを拝読した。間違ったことが書かれていたのではないが、龍爪会発足当時のことなどにはふれておられないので、いささか点晴を欠く思いがして、岡本氏には失礼だが、敢えて若干補足させて頂く。

先づ第一に龍爪会を語るにあたって忘れてはならない人が何人かいることを書き足して置きたい。

それは小沼 昇(33)、庵原市蔵(34)、町井吾六(同)、鈴木銑一(35)の諸君で、特筆すべきは片平忠治君(35)であろう。満洲事変の前後ではなかったか。

この中に僕も加わって、静中出身者で気の合う仲間が時々会おうじゃないかというので同志を糾合することになった。最初集まった

その程度であった。勿論、会長格もいなければ役員らしいものもない。ただ片平忠治君が幹事役を担当されて、一切を同君の運営にゆだねていた。

片平君は、知る人ぞ知る、柔道部の猛者で、中学時代は学内きっての人気者だった。そのお人柄と広い顔が物を言って、会の運営は極めて円滑、三十二・三回から四十回頃までの凡そ三十名位、全くの私的の集りであるにも拘らず、静中同窓の龍爪会といえ、一寸とした存在であったようである。

その片平君が一身上の都合で、戦後東京を去って静岡に移ってから、町井君等の肝入りで長谷川生彦君を引入れ、片平君の後任者として同君に会のお世話役をお願いすることとなった。

人には夫々持ち味があって、片平君は専ら気の合う仲間、なんの遠慮気兼ねのない同類に重点を置いたが、長谷川君は多少趣きが違っていて、社会的にも名声の高い実業界でも名をなしている優等生といった方面に志向したようである。

前田銑三氏や岡本氏にしても、或は水野成夫君などといった連中もその頃から入会してきた人達で、陣容もほころに足るものとなってはきたが、様相も異ってきた。

岡本氏の手許にある三十八年の龍爪会員名簿に、その数八十六名を数えているとの事であるが、誠にその通りで会勢大いに奮っていた事であろう。だが、しかし、会勢傾みに上っているのに古い顔が段々と見られなくなったのはどういふものか。会合が月並みになつて馬鹿話しも遠慮勝ちになり、お前、俺でなくなってくると集まる

楽しみも薄れてくる。龍爪会は同窓会ではなかった。しかし龍爪会としての存在意義と同志的感覚があった。それが同窓というだけのお座なりの会になっては、誰れが死のうが生きようが、立ち消えになつても不思議ではない。

かくて龍爪会も解散したという話も聞いてはいないが、いつとはなく雲散霧消したようである。



一番上 下山、刑部
 三列目 石川、片平、前田、鈴木、?、松永。
 二列目 川島、?、小沼、?、小林、田宮。
 一列目 布施、寺尾、庵原、狩野、三田、金原。

白球の行方

上野精三(44回)

半世紀も前のことですから、大方は忘却の彼方に消え去ってしまいいそうなものですが、アノ当時のことのいくつかは妙に生き生きとして私の脳裡に浮びます。

前橋中学との十九回もの延長戦になったキッカケは私も一役買っているのです。

八回裏の攻撃はすでに絶望的ともいえるスコア(5-1)でしたが、二死満塁で弱打者の私が打席に入りました。カウントは忘れましたが平凡な右中間の飛球を打ちあげました。走りながら「もういけないナ」と思っていましたら、何とその飛球を右翼手がポロリと落したではありませんか。二死ですから当然走者は走ります。二点の加点で場内はワッと沸く。走者となった私も、相手の内野の混乱による次々の失策で本塁を踏んで5-5の同点に漕ぎつけたのですが、これから延々十九回の死闘になる訳です。太陽のガラガラする炎熱の空に打ちあげたその平凡な

白球が今でもはっきり目に浮びます。

その翌日の準決勝は高松中学でしたが、この相手は優勝候補の一角と予想された打力が看板のチームが出場しても強かったのですが、予選で高松商(後に慶応の黄金時代といわれる宮武、水原、井川、堀などの名手が在学していました)を打倒する為に、という目的で右利きの打者をドンドン左打者に仕立てて、右投げ投手攻略を目指した学校でした。目的の高松商は松山商に敗れて優勝戦は、高松一中・松山商で争われましたが、これを大差で破って出場したチームでした。たしか五、六人は左打ちでした。これが私には幸したところになりました。万一私が右投げでしたら乱撃にあっていたらどうなんでしょうか。この試合は静中一回裏の攻撃で、第一打者戸崎中堅手が第一球を右中間深く本塁打しました。この一撃で勝負は決定した

のだと思います。戸崎選手は、日頃温和で、無口で、いつもニコニコと笑顔を絶やさない人で、いきなり第一球をねらって打ってでるような積極性がどこにひそんでいたのであらうと不思議でした。白球が左中間を抜いて駿足の走者がスライと塁間を走るさまは、息づまるようなスピード感がありました。外野を抜けて塀ぎわまで転々とする白球が目には浮びます。

優勝戦は大連商業でしたが、大柄な選手ばかりざらりと揃っていました。どちらも優勝戦という気持からだと思えますが堅くなったのでしよう。貧打戦でした。ヒットは一本と二本だったと思います。大連商に一点先取されたのが走者のいるとき私の投げたインサイドの低目の直球、ストライクとも思われる球を鎌さん(名捕手といわれた福島捕手)がどうしたはずみかハンブルし、これで一点先取されました。恐らく私のサインの見あやまりであったのでしよう。何分にもコチコチになっていましたから。ところが鎌さんは私のところにかけてきて「悪かった。俺がサインの思い違いをします。ごめん」と自分のミスにしましました。これで暴投のため一点先取された私の精神的な負

担も軽くなった訳です。この辺に鎌さんの名捕手としての片りんがうかがわれます。投手を生かすも殺すも捕手次第といえそうです。試合の結末は鎌さんの一撃がものを言って2-1で優勝するので

すが、ミットからこぼれて、コロコロと転がってバックネットの方に転々とする白球が今でも目の前にチラついてなりません。白球一つにかけた青春の思い出の一コマです。

甲子園今昔

国友正一(43回)

静岡中学野球部員として夏の大会に四回、春の選抜大会に二回、計六回も甲子園に行き、大正十五年夏は全国制覇と全く恵まれた野球生活だった。

見送りなど全く無く、関係者と選手の家族十数人の淋しい見送り、三時間足らずで行ける今と異なり、十二三時間余の旅立ちだった。

甲子園球場が完成した大正十三年、今まで見たこともなかった馬鹿でかい球場と五万人の大観衆に入場式では足が地に着かず、夢心地だったことを覚えていて、二回三回と進むにしたがって、あの独特な雰囲気にも慣れ、上ることもなくプレーが出来た。

当時甲子園球場附近は松林と畑で旅館等なく、出場校は皆鳴尾村の仕舞家を借り、賄の人が来て食事の世話をし、二人で満員になる風呂に入り、掃除、洗濯、蒲団の上げ下げは選手がやったものだった。球場も完成当時と現在では広さに変化が見られる。

五十数年を経た今、甲子園野球もいろいろな面で大きく変わった。私達の頃、甲子園に出発の日、応援団プラスチックバンドを先頭に盛大な

戦前はバックネットが二十米程スタンド寄りに、ダッグ・アウトとホームプレートとの間が五十米位あり、外野にはラッキーゾーンも無く、両翼は今より三十米も深く

ホームランはランニング・ホーム
 ーだった。神港商業の山下、高松
 商業の宮武選手がワンバウンドで
 外野フェンスに当てたときには皆
 驚いた。

ローヤルジャイアンツというア
 メリカの黒人チームが来日、デ
 イクソン選手が左中間フェンスに
 ダイレクトで当て、そこにディク
 ソンの名前が書き込まれ、戦後ま
 で残されていたのを覚えてい

現在スタンド入りのホームラン
 が数多く出る様になったのは何故
 か。私達の時代はボールを前で叩
 き、内野手の間を抜くことを教え
 られた。ゴルフで言う手打なので
 飛ぶ訳がなかった。球場が狭く
 なったとは言え、近代野球は肩と
 腰の回転と重心の移動を利用しフ
 オロースルーを大きく取る打法に
 変わり、飛距離が大きくなった。そ
 れに体格の相違も見逃せない。身
 長一米七十二釐、体重六十五斤の
 私は当時大きい方だった。現在一
 米八十釐、八十斤以上の選手は数
 多い。

今一つ飛距離が延びた要因に、
 三年前から使用が許可になった金
 属バットがある。木製バットはシ
 ンでとらえないと、折れるか、凡
 打だが、金属バットは折れること
 もなく、球足も速く、シンに当れ

ばオーバーフェンスも軽い。打法
 の変革、体格の向上、用具の改良
 が飛距離を大きくしたのではない
 かと思う。

ただ、近年眼鏡使用の選手が多
 いのにはいささか驚く。私達の頃
 は眼鏡をかけた者はほとんどいな
 かった。たまに見かけると珍しげ
 に見たものだった。自分に合った
 眼鏡を使用してプレーすることは
 大いに結構。今考えると、昔は眼
 鏡を掛けると野球生命を失うので
 はないかと思ひ、無理をしていた
 選手も相当あった様だ。

投打の技術は確かに進歩してい
 ることは認める。然しインサイド
 ベースボールに関する限り昔の選
 手の方が良く研究し、身につけて
 いた様に思う。何時頃から始った
 風習か知らないが、試合に敗れ球
 場を去る選手がグラウンドの土を持
 ち帰る姿を目にする。これをとや
 角言う気持ちはない。私達は「明
 日から猛練習して、来年も必ず来
 る」と心に誓って、一度も甲子園
 の土は持って帰らなかった。その
 せいかわりか、六回も甲子園の土
 を踏むことが出来たし、戦後プロ
 野球の審判になり、百回以上、甲
 子園のお世話になったのも何かの
 因縁かも知れない。

先日、戦災で焼失した優勝記念

のレプリカが、多くの方々の御尽
 力で、再び母校に帰って来た。私
 も心から喜んでゐる者の一人だ。
 来年開校百年を迎える静高野球部

よみがえるレプリカ

編 集 部

大正十五年、第十二回全国中等
 学校優勝野球大会での静中の全国
 制覇は、県高校野球史のなかでも
 一きわ輝く記録だ。甲子園大会で
 静岡県代表が優勝旗を手にしたの
 はこの時が最初で最後。レプリカ
 は「学校の宝」として大切に保管
 してあったが、昭和二十年六月二
 十日の空襲で学校が焼失、レプリ
 カも失われてしまった。

来年三月で母校は、明治十一年
 静岡師範学校の付属校として開校
 して以来百年を迎える。すでに各
 方面では「静中・静高の歴史を記
 録にとどめよう」と百年史の編集
 を行なうなど百歳の誕生日を祝う
 ためさまざまな行事を計画してき
 た。しかし、どうしても足りない
 のが静中全国制覇の記念品―レプ
 リカだった。

「どうにかして複製したい」と

選手諸君に、私達の終生忘れるこ
 との出来ない感激を、今一度味わ
 ってもらいたいと願っている。

の声は優勝当時のプレーヤー国友
 正一(43)上野精三(44)の両氏
 ばかりでなく、優勝の「伝説」を
 聞いて育った戦後派の卒業生や教
 職員の間でも強かった。三浦現校
 長や柳川副会長らが朝日新聞社や
 日本高野連に「もう一度レプリカ
 を」と働きかけるようになったの
 も、こうした声に押されたものだ
 った。

「ぜひともほしい、と思っ

の朝日新聞や日本高野連の思いや
 りが異例のレプリカ複製へと踏み
 切らせた。

三浦校長は「百年祭への何より
 のプレゼント。出来るだけ多くの
 関係者にお見せして五十年前の先
 輩の偉業を伝えたい。それに現役
 の部員たちも先輩たちに負けずに
 大優勝旗を持ち帰ってもらおう発奮
 材料になれば」と大喜び。

投手として県予選、神静大会、
 甲子園と投げ抜いた上野氏、一塁
 手だった国友氏の二人は、三月三
 日の贈呈式にはもちろん参加、同
 十九日の終業式の際に行なわれた
 全校生徒のほか県内外のOBを招
 いた公開にも立ち合った。

今回のレプリカの複製は「大正
 十五年当時のものを出来るだけ再
 現したい」との朝日新聞大阪本社
 資材部の「取材活動」からスター
 トした。大会の名前だけでもいま
 の全国高校野球選手権がその当時
 は全国中等学校優勝大会と呼ばれ
 ており、字体もかなり違っていた
 ことなどから「百聞は一見にしか
 ず」とばかり、今年初め大正後半
 から昭和前半の大会で優勝した各
 校に各支局を通じて調査を依頼、
 今年一月中旬になってやっと昭和
 四年優勝の広島商にレプリカがの
 こっていることがわかり、一月二

十二日、カラー写真で記録をとった。

このデータをもとに毎年レプリカ製作を依頼する京都の織物業者に特注、待望の静中優勝のレプリカが出来上がったのは二月二十日だった。

たて一メートル、横六十八センチで重さは一キロと大優勝旗に比べるとかなりミニサイズ。しかし

正絹西陣織に京友染本染を施し、紫の房のついた本格的な深紅の旗となった。現在のレプリカとちよつぱり違うのは大会名。字体のほかに主権が現在の朝日新聞社の前身「大阪朝日新聞社」となっていること、「六万一千円ほどかかりましたが、やはり優勝の記念になるだけのものです」と関係者も満足そうだった。

レプリカの下に横書きで、ヴィクトリア・パルメ(勝者に栄光あれ)と見える。ヴィクトリー

ブスはラテン語の第三変化男性名詞、Victor, oris(勝者)の与格複数、パルメは同じく第一変化女性名詞、Palma, ae(栄光)の主格複数である。Palmaは本来、棕櫚の意。その昔キリストがエルサレムに入場したとき、老若男女は手に手にその枝をもち

全国中等學校優勝野球大會



VICTORIBUS PALMAE
第十二回優勝記念

く喜び迎えた。それはあたかも王の凱旋のときのようなありさまであった。したがって棕櫚は勝利のしるしである。

解説・カトリック教会

いろいろな

青木 静 男 (59回)

「白球」「甲子園」「レプリカ」

と、野球の話がつづく。私は野球の部員でもなかったし、今でも野球のことはよくわからない。にもかかわらず、実戦で輝やかしい栄誉を担われた選手・先輩諸兄の筆と同じ紙面で、たとえそれが素人の少年の想いで話にすぎないものであったとしても、こともあろうに野球について触れるなど、あつかましさにもほどがあると思う。

けれども、わりつけの都合で余白をうめるのも編集子の役であるときく。ならば幸い、昭和十四年夏の予選の頃、私なりにうけた野球の映像をこの84行にうめて見よう。私が一年生のときだったからもう四十年前も前の話だ。日記などあるわけではなく、網膜に焼きついた残像と記憶をたよりに思いつくままを書きながって見る。

第廿五回全国中等学校優勝野球大会。朝日新聞には入場券のつづりが折り込みで。島商や掛中が強かった頃だ。栗原の球場だった。緒戦は静商と。11-10で勝った。

相手の投手は佐野とかいった。球審に萩原とよぶ人がいた。打順は

1 小野田(中) 2 植田(二) 3 高信(三) 4 福井(捕) 5 原(左) 6 八百兄(遊) 7 稲葉(一) 8 八百弟(投) 9 土屋(右)。ウィニング・ボールは右飛。日没で暗くなった空から、炭団のように落ちてきたのを夢中で掴んだと土屋先輩は話した。中盤で稲葉先輩が満塁走者一掃打していたからよかつたものの、勉強校では眼鏡手も多く、夕闇には不利で一点づつ差を縮められてゆく気が気でなさ。夜間照明などなし。家には八時頃。

準決勝では最後に先頭打者・杉山を三振させ掛中を破ったが、決勝で島商に敗れた。「弱冠14才・八百投手」と見出し。御家族総出で試合声援。監督は法政のカラ沢という黒い人。藤波精肉店隣で合宿。静中びいきにいろんなのがいた。加藤なる写真屋。配達途中必見氏と連れ。井上という片手を懐のこわい爺さんは選手通で、植田先輩は清水の入江だよ。絹豆腐的

球さばき。福井先輩はカフェーの子。軀が大きく、あたるとバカでかいぞ。喉が弱く飴をなめながらマスクをかぶった時も。土屋先輩は宝台院近くの餅屋の倅。餅を食べてなぜ膾炙していると訝っている。

高信先輩は攻守走に聞えた主将。ただし投手をやったときは四球を十四個も。ノックでは三・本間に素手で構えてゴロをの意地が。小野田先輩は駿足と感で守走に光る名トップ。稲葉先輩は打撃練習時の捕手も。「ハイいくよ」の声が励みに。八百兄先輩は豪球、超美技と凡失が交互。原先輩の捕球は神主式だ……など、解説に熱が。九人の先輩たちは元気でいるだろうか？ 読んだら、私の記憶が違おうと笑うだろうか？ つまらぬことまで覚えていられては迷惑だと怒るだろうか？ 野キチなら変り種。静清国道を帰る自転車の上や鷹匠町行の電車の中で論評を続ける正常？ 派、仕事手つかず飯いらず、白球を見れば病気が治る迄、いろんながある。みなが選手や応援団にも負けず心そこ野球を愛する「なかま」だと思ふ。百年祭も近づく。静高は進学校、野球でまた全国制覇でもすれば「天は二物を与えず」の格言も破れよう。冥土への土産話にぜひ一つ頼む。

幻の静中水泳部々歌

畔柳 安雄 (35回)

静中の水泳部が江尻の海岸から袖師に移ったのは大正の末で、当時この水泳訓練は一、二年生は準正課、三年生以上は随意参加となっていて、毎年広島高師から水府流の師範を招き、卒業生が七、八名必ずお手伝いに来ていた。私がこのお手伝いの仲間に入ったのは昭和二年の夏からで、丁度わが国競泳がその黎明期を迎えた頃といつていい。内田正練がマニラの国際大会に唯一人参加して水府流の早拔手、片拔手一重伸で三種目に優勝したのが大正七年、小野田、高石の台頭でクロール時代を迎えたのが大正の末から昭和の始めにかけてであったから、師範格の私も密かに浜名湾の後輩からクロール泳法を教わる始末で、わが水泳部も各種の競技会に選手を派遣するようになったのはブルののできた前後からであった。

幸いその頃のお役所は七月二十一日から八月一杯は毎日半日勤務であったから、独り者の私は毎日



のプール通いは勿論、合宿のあるときなど、合宿から役所へなどということも珍らしくはなかった。

こんな環境にあつて選手の士気の昂揚に是非水泳部の歌をとっ思た私は親しくしていただいた城内西小学校の青山於菟校長に作詞、城内尋高の勝呂先生にその作曲を願うてできたのが次の歌である。

一、東海の空に高光る

富士ヶ嶺おろし吹き荒れて

三保の浦曲に立つ波の

くだけて散るや磯の花

二、……

歌詞はたしか第四節まであり、選手激励の応援歌的な文句もあつたのだが、残念ながら二節以下は全く覚えていない。前掲の楽譜は私が歌つて音楽学校へ入つたばかりの孫娘に書き採らせたものであつるが、もともと音痴の私のことだから、多少原譜とは狂っているかも知れない。

それにしても一緒に歌つた諸君は確かに現存しているはずだが、誰か覚えていないだろうか。ブルができてからも袖師の水泳訓練は続いていて、四四回卒の矢田敬三君がよくハモニカで音頭をとつて合唱させていたのが目に残っているが……。

この歌がたいして歌われないまま今や幻の歌となつてしまったの

は、昭和七年のロスアンゼルス、オリンピックの応援歌

「走れ大地を力の限り、泳げせいせいしぶきを上げて……」

という勇壮な応援歌が、その前年からラジオを通して全国を風靡して、私もいつしか折角の水泳部歌よりもこの歌の方にとりつかれてしまったからだと思われる。今にして思えば洵においしいことをしたものであり、青山・勝呂両先生にも申し訳けないことをしたものだと思つて悔んでいる。

ただこの歌が新聞・高木のオリンピック選手を生んだ当時の水泳部の団結に、何がなし果した蔭の力は否むべくもなく、無為に幻と化したのではないと信じている私は、この歌に感謝を捧げるとともに、できることならその再生が望まれてならないのである。

ことば

ために要らず

青木 静男 (59回)

場末の赤提灯。とまり木の端で連れと飲んでいるおっさんの静岡訛りが気になる。こちらもいい加減でき上っているから定かでない

雑 感

が御用心。どうやら中学時代の話のよう。しかも状況は長谷近く。やがて「俺らん静中の頃にヤア」ときたではないか。雨の夜更け。これで決まりです。飲代はロハ。白バイにひっつかまされた。危篤の病人に引導をわたすのも神父の職務だ。がらいスピードの出しすぎ。急いでいたので言訳は思わず静岡弁で。何んとポリも同郷。「しよんねえ」と砂漠に流離の感傷。これっきりですよ。無罪？ 放免。

会員の親睦を深めるためのクラブ活動に麻雀はどうであるかとの提案に対して一部難色を示す向もあつたが、まず、やってみなければ是非の判断はむずかしいとの決論に達し、これの具体化を押し進めるため柳川委員長が先頭に立ち二、三の推進委員と涙ぐましい？ 努力を続けた末、「つどい」にも報告の通り、麻雀大会開催の運びとなつたのであるが、人によってルールの違いなどあつて必ずしも満足のいく結果ではなかつた。しかし、各期の親睦を深めるのにはもつてこいのものなので、今後、運営を工夫し、続けて行きたいと思つている



フイジー紀行

芹沢 正 憲 (43回)

ブルーの空にうろこ雲。ホノルル空港を飛び立ったエア・カンタスのボーイング・ジャンボは、ひたすらに上昇を続けて一路フイジーへ。時差ほけの寝不足でうつらうつらしていると突如 HAPPY NEW YEAR の金切声で起こされる。見ればバンガクのようなステューワーズがラフな仕草でジャンパンを抜いている。それにしても今日はまだ大晦日の筈なんだが、と狐に化かされた思いでいると隣りのもの知りが、「日付変更線にかかったんです。フイジーの首島ピチレブももうすぐ」と教えてくれる。

まもなくベルトじめのサインがでると眼下におおらかに展開するエメラルドの海、亭々としたやしの島々が夢のような姿を表わす。ナンデイの空港はローカル並のちやちやなものだが開発途上国だけにノンビザでも愛想よくパスさせ

る。ここから予約してあるサンゴ海岸のホテルまでおんぼろタクシーを走らせる。空港を出たとたんハイウェイの舗装は尻切とんぼ。赤土の道ほけはもうもうと砂塵を舞上らせる言語に絶する悪路である。驚いたことには急ブレーキを踏む土人の足もととはなんとほだしである。

首都のそば迄二百キロのこの道ほけの何処が「クインスロード」なんだ。よくも言えたよとぶつくさ言っている車窓から青い海と白い渚が視野に入る。停車。あじさしが、真赤なブーゲンビリア紫のジャカラントの咲き誇る岩上から、軽妙なアクロバットを見せながら紺碧の海にダイビングする。海はどこ迄も透明である。さるんご礁を泳ぎまわる極彩色の熱帯魚！ 沛然とスコールが通り過ぎる。文明の触手から遠ざかった島々ではあるが荒いデッサンの中に

もシニカルなタッチが溶け合うすばらしい大自然！

ホテルにチェックイン、丁度、元旦のためカナダのツアーで殆んど満杯。他に日本人は見えない。庭さきではツアーのため伝統のメケのショウが派手な民族衣装と長槍、単調な大鼓のリズムにのって陽気にくり抜かれている。元来フイジーは未開の地で獍猛な首刈族として恐れられていた。部族間の抗争をくりかえすたびに犠牲者の軀はヤブササに持ちかえられて地炉でむし焼にして食われてしまった。この食人の習慣は近世迄続いて、なかには千人の人間を食った記録も残っている。

きょうはその食人の行事ウムの現代版。地炉の中に灼熱した石ころ、その上に丸身の豚、赤土をかぶせてバナナの葉で掩う。奇声を発しながら踊りまくるうち、程よくむし上るといふ按配だ。血に飢えたハイエナのような面構えの酋長を見ていると、ほんとはあなた方を喰いたいのだ！ とつぶやいているように見える。

酋長との握手はいつもろくな結果を生まなかった。あとで必ず高価な土産品を買わされるからだ。

酋長恐怖症にかかった私もこの期に及んでこれ以上の断りはアンチエチケットと判断、潔く握手。高見山はだしの仁王タイプ。それでもひげ面の奥に人なつっこい童べ顔がのぞいている。日本人は大好きだ！ われ鐘のような御託宣。次いで熊手のような掌で握りしめられた握力のなんとオクターブの高かったことよ！

それはしても大太平洋戦争中日本は作戦の一環としてこの島を占領する計画を立てたがミッドウェイ海戦惨敗で急遽断念したという。もし日本軍が上陸していたなら、と私は思わず肌寒さをおぼえた。空は黒ずみセピア色になり、ついに暗緑色に染まる。ジャスミンのふくよかな香りがそこはかとなく漂う。南の海の星は近くて大つぶである。サザンクロスはどのあたりだろうか。私の思いは千々に乱れて無限大の空間を流れ星のようにさまようのだった。

私の経歴とある思い出話

石 割 正 (38回)

私は静中第三十八回卒業生であるから今から、五十五年前のことである。大正十二年東京大震災の年に商船学校にはいったのであったが、学校が九月一日の震災で烏有に帰してしまったので、そのあとバラックで学生生活をしたことが思い出されて来る。

昭和二年商船学校を卒業して三井物産船舶部(後の三井船舶、合併で現在の大阪商船三井船舶)に

入社、そこで運転士として商船に乗船、世界各地の国際航路に従事し、昭和十四年船長となる。昭和十六年海軍応召、幾多の危険に遭遇するも無事生還して、昭和二十年終戦により復員、会社に復帰して昭和四十一年大阪商船三井船舶を退社する。昭和四十二年団法人日本船長協会に就職、現在に至る、というのが私の略歴である。在校中は静中のあばれん坊で通

した私であったが、柔道や、ランニングなどスポーツを相当熱心にやってお蔭で、県下の一部同年輩の連中には、聊か勇名をはせていた。

商船学校に入ってから、土地を離れて殆んど静岡での生活をしていなかったため、校友とも随分長い間疎遠になっていた。静岡同窓会に対しては以前から多少共闘心を持っており、四十二回卒業の井出多米夫氏を通じて連絡していた程度であったが、最近になって

静岡・静岡同窓会関東支部の諸兄とも交友を重ねるようになった。中学校を出てから五十数年も経つし、他にも幾多知名の同窓のある中で、今更、先輩面をしても初まらないが静岡というイメージに対する愛郷の念では、決して人後に落ちないと思ひ、先年、関東支部の顧問を引き受け、若い者の仲間入りさせてもらうことにした。

私は、昭和十四年以來、船長として二十七年間陸に約半々の生活をし、概ね、悔いない人生を過ごして来たと思つてゐるが、海軍応召の喰うか喰われるかの苛烈な戦斗を体験し、よくぞ生き残つたと、不可思議な運命を回顧してあれから三十数年経つた今日でも決して当時の模様は忘れることは

出来ないものである。ほんとうに、人生とは、その人につきまとう運命の星を、如何に誠実に、うまく切り抜けるかにかかっていることを思い、かけがえのない命は大切にすべきことを強調するものである。

私が海軍に召されたのは昭和十六年八月十五日であったが、これは天津に居た船長が都合で召出されなくなったので、それを買つて出た代人召であった。これが、私の運命を大きく変えた原因でもあり、運命とは思議な糸によりあやつられてゐることを痛感する所以でもある。どうして私がある危険な戦争に卒先して参加し、妻の反対も押し切つて、召を買つて出なければならなかつたかについては、深い訳があつた。

それは、昭和十五年十二月三日冬の寒い夜のことであつた。折から、房州の野島沖を航行中のT丸は、大阪向けの微粉硫化鉄鉱をつんでいたが、その積荷が時化のため移動して沈没した事件があつた問題となつていたのであつた。幸にして、乗組員に死傷こそなかつたが船舶の最高責任者である私は、船長として沈没の責任をまぬかれることは出来なかつたのである。海難審判を八月に控えて落ち

つかない毎日であり、気が滅入つてゐるときであつたため、召されて死ぬなら、それでよいではないか、むしろ死にたいという気で一杯だったからであつた。一般に、船舶の遭難、衝突等の事故に対しては海難審判が行われ、責任の所在を明かにせねばならぬ海難審判という法律があつて、当時は、特に船員懲戒法といつて船員に対して非常に厳しい罰則があつた。現在では、大分緩和されて、海難の原因探究が主となつて、船員の懲戒は二の次になつてゐる。理事官

(検事に相当するもの)の言い分は、あなたはT丸を沈没させ船舶の代金七十万円と積荷の代金十萬円の損害を社会に与えた。これに對し私はあなたを罰しなければならぬ。私の質問に對して正直にこたえてもらいたいといつて、最初から罪人扱いであつた。普通、この種の海難は船長が欠席しても審判が出来るのであるが、本件はどうしても船長が直接出席して審判を開いてもらいたいといふきつ

い通達であつたため、八月二十三日の審判開廷に備えて待機中、もち上つた召の話であつた。したがつて召が八月十五日に決定したので審判は繰り上げて開廷せざるを得なくなり、九日大阪

で審判を受けることとなつたのであつた。船長として船を沈めた責任と、時化の中、今にも沈没という危険のさ中に全員を無事退避させた当時の状況等を回顧して、胸のつまる思いの答弁に、涙をもよおす場面もあつて、悲壯な審判風景を展開したが、気がかりな審判も無事終つて、予定通り、八月十五日には一切の水に流して、再起一番晴れて召したのであつた。

理事官の論告は、極めて厳しく、船長の免状停止一ヶ月半というものであつたが、召のこともあつて結局は不可抗力による沈没ということと懲戒の裁決を受けたことは幸であつた。

戦争に召してからの四年間は文字通り生死の中にあり、何時死ぬかも知れないという危険な場面に遭遇したことも再三ではなかつたが、その都度生き延びて、遂に昭和二十年八月十五日の終戦を迎えたのであつた。戦争とはむごいものであつた。或は、機動部隊の空襲をうけ、或は、潜水艦の雷撃をうけて沈んだ船は数え切れない程である。中でも手薄な船団が敵の襲撃をうけて逃げ回る光景は最も哀れであつた。逆に敵潜をとらえ、これを沈めたときは痛快だつた。これら戦争に関する話は沢山

あるが、今回はそれを書くのが目的ではないから割愛することとしたい。

戦争が終つて復員したある日のこと、以前T丸の沈没に係したこと、先輩との談合のとき、先輩曰く、「君はT丸沈没でえらい責任を感じてゐるようだが、実はえらい功績を残したことになる」とのことであつた。それは、終戦になつて戦時中沈没等遭難した船舶に對する戦時補償が全部打ち切りとなつて、海運会社は船舶の損害に對する一切の損害保険の補償が全部受理出来なくなつたことである。T丸が沈没した保険金七十万円は、当時そのまま会社が受理して、次の新造船A丸の建造資金として立派に流用されたからであつた。春秋の筆法をもつてすれば、君は会社に對し非常に功績があつたといふのであつた。

運命とは、まことに不思議で不可解なものである。死ぬ程の思いで責任を感じ、召して死ぬつもりだったが、却つて生還の道をつくり、T丸の沈没は会社に對して功績だつたとは願つてもないことであつた。これも戦争で生き残つたお蔭であり、神のみ知る運命のいたずらに、當時を回顧してあれこれと思ふ今日この頃である。

あるが、今回はそれを書くのが目的ではないから割愛することとしたい。

戦争が終つて復員したある日のこと、先輩との談合のとき、先輩曰く、「君はT丸沈没でえらい責任を感じてゐるようだが、実はえらい功績を残したことになる」とのことであつた。それは、終戦になつて戦時中沈没等遭難した船舶に對する戦時補償が全部打ち切りとなつて、海運会社は船舶の損害に對する一切の損害保険の補償が全部受理出来なくなつたことである。T丸が沈没した保険金七十万円は、当時そのまま会社が受理して、次の新造船A丸の建造資金として立派に流用されたからであつた。春秋の筆法をもつてすれば、君は会社に對し非常に功績があつたといふのであつた。

命の恩人よ名乗り出てくれ

畔柳 安雄 (35回)

昭和二十年の十月、私は過度の栄養失調に陥って天津の捕虜収容所の一室のベッドに終日横になっていた。右を下に寝れば顔の右が大きくふくれ、左を下にすれば忽ち左に顔が曲るほどのムクミである。勿論、手足もその埒外ではなく、階段の昇り降りもままならず当時唯一の日課であった医務室通いも怠り勝ちになっていた。恐らく過去一年余り最前線での無理がたたつたことと思われるが、切角ここまで生き延びてきたのにこの有様では無事内地の土を踏めるかどうか、口にこそ出さなかつたが心の底にあるこの不安は拭うことができなかった毎日であった。

丁度その頃一人の軍医少佐が私の室へ入ってきた。私は寝台の上に起き上って目礼をしたところ、「畔柳さんというのは貴男ですか」「ことによつて静岡中学の卒業生で水泳部のキャプテンをされた方と違いますか」と畳みかけるような質問である。私は「当時キャプテンなどという制度はなかったけれど確かに水泳部に居りましたし、卒業後も何年かコーチに行っていました」と答えると「矢張りそうでしたか。私は花崎という貴男の後輩です。禪の締め方から教わつて、かなりシゴかれたものです。天津はご承知のとおり後方最大の補給基地で医薬品も食糧も有り余るほどあります。安心して私に委せて下さい。朝晩私が治療に來ますから医務室へはこなくともいいです」といつてくれた。それにしてもどうして私が静中の卒業生とわかつたかといえ、名

字の「畔」と書いて「くろ」とよませるのが花崎氏の幼な心に不思議に焼きついていたからだという。爾来朝晩必ずやつて来てくれたし、自分の都合のつかない時は部下の軍医を差向けてくれ、お蔭で十一月末の帰還船で内地の土を踏むことができた。私にとつては花崎氏は正に命の恩人である。私はあらゆる伝手をもとめて花崎氏の名を知ろうとしたが、今日まで全く徒勞に終つている。ところが五月十二日静岡で開か

れた三五会の席上、加藤正二君がその花崎は私の連隊のものに違いないと現在奥多摩にいる住所と電話番号を覚えてくれた。

私は三十余年間の心の重しを解消できると大いに喜んで電話してみた。

「私は終戦当時軍医少佐で確かに天津に勤務していました。然し私は沼津中学の卒業生ですし、天津時代も直接治療に當つてはいませんでした。軍医少佐はもう一人いましたが、勿論、花崎という軍医は私一人でした。どういふ間違

いか知れませんが、これも何かのご縁でしょう。今奥多摩は新緑で素晴らしい季節、是非一度遊びに來て天津の話でもしませんか」といわれる。

どうやらこれも人違いとわかつたが静中の卒業生で天津で私を助けてくれた人はたしかにいたのである。

それにしても私が沼中卒業生の花崎氏のお名前を記憶しているのも不思議だし、ことによると静中の卒業生の某軍医が語つた花崎氏(静岡市新通の磯野氏の長女と結婚されている)の消息が私の記憶

の中で某軍医と二重写しになっていたのかも知れないと思ひ始めて

いる。

静中卒業生の某さん、どうか私に一言のお礼をいわせていただき、私は死ぬまで待つています。

今日の問題

同窓会

編 集 部

(新聞より)

近ごろ同窓会がさかんである。それも人間関係の希薄な大学の同窓会はまれで、旧制の中学校、陸士、海兵などの昔の軍関係の学校、旧制の高校、高専などの集まりが多いようだ。

なぜ最近同窓会ばかりなのか。何といつても職業が雑多だから、互いに仕事の上の便宜がある。また、娘の縁談や定年後の身のふり方を考へて出席する人もいるだろう。中には同窓会を選挙運動に利用しようとする人間もいないわけではない。

こうした実利的な面のあることは否定できないが、同窓会が多くの人たちを引きつけるものも、とほかの要素が大きいのではなからうか。

まこと同窓会は現代人にとつては昔の友人を通じて自分の青春を確認するという懐古趣味以上の役

割を果たしているように思う。現代社会は余りにも管理社会化している。現代人は息がつまりそうなる組織の中であつちこつち氣を使ひながら生きていく。

一切気どりはいらさず、建前なく本音で話し合える同窓会のような集まりは、現代社会の中では例えてみれば砂ばくの中のオアシスのようなものではなからうか。い方を變えれば、同窓会は現代人にとつて「精神的レジャー」なのでもあろう。

現代社会には連帯感が失われつつある。さまざまな集団は露骨に自己主張をするし、企業間、企業内の生き残り競争は激しい。同窓会が盛況という現象は、いま一つ現代人が、失われつつある連帯感の回復のよりどころを求めていることの現れ、といえないだらうか。



静岡民謡を想う

杉山 栄 一 (47回)

この唄が生れたという。

市丸が、戦後ビクターからこの唄をレコードに吹きこんで有名になったわけだ。

このとき白秋さんが書いた詩は二十余种あったそうだ。その中で「狐音頭」が本命であったのに、副産物である「ちゃつきり節」にお株を奪われたことを知る人は案外少ない。

静岡は気候、風土に恵まれ、豊かな土地だけにレジャーも多く、唄や盆踊りをそれほど必要としなために、寒い裏日本や東北地方に比して、有名な民謡が育たなかったのだと思う。

決して静岡に民謡がなかったわけではない。静岡市にも、安倍奥にも、庵原郡や志太郡にも、各地に作業唄や祝唄がたくさん唄われていた。

静岡新聞社の発行した「ふるさと百話」の第四巻に、小川竜彦さんが静岡民謡について詳細に述べている。とくに伊豆地方には海の唄が多い。

ただ唄いつづけ、伝承してゆく背景が暖国の静岡には、寒い北国のようになかったからだ。

世界的に見ても、北国へ行くほどよい歌や音楽が多いといわれていることからもうなづける。

静岡市、庵原、安倍地方に伝わる、お茶をホイロの上でもむときに唄われた「茶ぶし」は、お茶をデングリ返してもむ作業は手の甲が痛くなるから、旦那さんにやらせたくない、女房が亭主の労働を思いやった夫婦愛の唄で、ほほえましく、いかにも静岡県人らしい温か味をただよわせている。

昔は日本三大急流の一つといわれた富士川にも「富士川の船唄」がある。わたしは長い間この唄を探し求め、やっと見つけて習得した。

甲州の鵜沢から岩淵まで、半日ばかりで物資を輸送したときの船頭唄だ。仕事のすんだ船は身延へ向けて河の上を曳きながら戻したという。

日本の民謡は作業唄が多く、山の唄、海の唄、河の唄、野の唄など民衆の生活の中から生れたものだが、現代は生活そのものが変化し、あらゆる産業がオートメ化されて、作業唄が不要になり、民謡は洋菓子のドーナツのようにその中心を失い、またこれが必要とした人びとも、もはや故人の域に入っているのだから、「唄の故郷」は消えてしまったわけだ。

泥くさい元唄が洗練され、観光資源化され、ステージ芸人や花柳

界で、色っぽく唄われてゆくのもやむを得ないことだろう。

「ちゃつきり節」と同じように青森県の「八戸小唄」、福島県の「新相馬節」、千葉県の「白浜音頭」、中山晋平さんの、新潟県の「十日町小唄」、鳥根県の「三朝小唄」など、一連の創作民謡が、これからの時代にそくした民謡として愛唱されることだろう。

後の世に、昭和時代の創作民謡の中で、町田佳声さんの傑作の一つとして、また静岡の代表民謡として、「ちゃつきり節」がさらに賞讃される日がくることと思う。

なお安倍奥の「麦つき唄」「草刈唄」など、ご存知の方はお教えねがいたい。

ちゃつきり節

唄はちゃつきり節 男は次郎長

花は たちばな

夏は たちばな 茶のかおり

ちゃつきりちゃつきりちゃつきり

りよ

きやあるがなくな 雨ずらよ

狐音頭

狐十七よ 千手の寺にぼんぼん

こよい願あけ もちの月

ホイノホイノ ホワイホイ

もひとつ ホワイ ホイホイ

日本民謡集をはじめ、いろいろな民謡歌集の本を開いて、静岡県の民謡欄を探すと「農兵節」(富士の白雪ヤノエ)「下田節」、「ちゃつきり節」がたいてい記載されている。

他県の宿屋や料理屋で配る小さな歌の本にさえ「ちゃつきり節」は載っている。

こんな調子だから他県の人は、「ちゃつきり節」が静岡県の代表民謡だと思いきんでいる。

「ちゃつきり節」がこれだけ有名になったのは結構なことだ。

私が民謡が好きで静岡生れだとわかると、宴席で、では「ちゃつきり節」を一つ……と、よく所望される。「ちゃつきり節」といわれるたびに私はゾツとする。

皆さんもご存知のように、この唄は三味線の合の手が多くて唄いにくく、独りでは唄いばえがしな

いし、また、厳密な意味で民謡とはいえないので、嫌いだからだ。「民謡は心のふるさと、われわれの遠い祖先が、素朴な生活の中から生み出した豊かな心の現われです」と、NHKのラジオが毎週水曜日の夜九時に放送する如く、民謡は庶民の生活に根を置いて自然的に発生し、生活とともにあったもので、楽譜もなく口伝で、民衆の魂がこもっている。

しかるに「ちゃつきり節」は昭和二年、わたしが静中へ入学した年に、静岡電鉄が狐ヶ崎に遊園地を造った際、静岡の観光と産業宣伝のために、北原白秋さんと町田佳声さんのお二人に依頼して作らせた創作曲だ。

北原白秋さんが静岡の二丁町遊廓で、老妓が蛙が鳴くのを聞いて「きやあるがなくな 雨ずらよ」と、つぶやいたのにヒントを得て

茶ぶし

へお茶の デングリもみヤア
こう手がいたむ
もませたくない わが夫に

富士川の船唄

へ富士川下れば 岩淵どまりヨ
ヤッコラセ ヤッコラセ
明けりや身延へ ヤレコノセ
ひきオ船ヨ ヤッコラセヤッコ

ラセ

へ波は船べりドドドンと叩くヨ
ぬれて竿さす びょうぶ岩ヨ
へ船は帆かけて 川瀬を登るヨ
かわい妻子が 出て招くヨ

追記・民謡の好きな方、カセツ
トお送り下されば、静岡及び他県
の歌も吹きこんでお送りします。

昔噺 あんつるさん

月見里 得知郎(53回)

皆さんは「駿府のあんつるさん」という人の話をご存じだろうか。先年も文芸春秋の別冊に載っていたことなのでお読みの方もあろう。又私の様に子供の頃老人達のおとぎ話でお聞きの方もあろうかと思ひます。

私が聞いたのは、或る日の夕方あんつるさんが濠端を通ると、狐が前足で濠をしゃくっては頭に被り段々と女の姿に化けているのを見つけた。そこであんつるさんは半化けの狐の後にしのびより、ポンと肩を叩いて「ねえさん、なにをしてるだね?」と話しかけ……

鶴さんになった訳です。前記安鶴在世記の序によれば、

「栄寿軒安鶴ぬしは若き時より

種々のわざに心を尽し世に凡ゆる
細工物ほど字ばずして心の儘に造
りなし或る時には八人芸、昔噺、
手品、軽業、力封、角力、行司な
どくさん、のわざを為し諸人達の
耳目をよるこぼしめ、風流の友が
きに交り彫物、印刻、絵画なども
なし、自ら遠つ国々にまで名の響
くこと名にしおう鶴の声のひとし
くきこゆめり。この度在世記とい
へるふみをかかれし時そらごとを
いはずにまさごとをのみありだし
て先初篇とし世の人のよく知ると
ころつづらしたるものなり。いさ
さか其のよしを文久二年成年十月
するす。」(翠屋閑人誌)

となつて居る。この中八人芸とあ
るのは障子の向う側に居て、鼓を
肩に、大皮を小脇に、小太鼓や鉦
を前に置き、笛・三味線を奏でな
がら新内・端唄、二上り・三下り
何でもござれで歌うのだが、之が
どう聞いても一人でやっているか
と思えなかつたと言う。他に狂歌・
俳句・映し画(影絵のこと)から
落語まで上手という大へん器用で
元氣な人であつたらしい。

というくだりがあつて之がもとの
話であるが前記の著書によれば大
体次の様です。

安鶴は元来左官職が本業であつ
た。天保二年九月十一日、得意先
の駿府呉服町四丁目唐木屋薬店
土蔵の普請をして居た時突然近く
に積んであつた古屋根板の間から
一疋の白狐が飛び出した。安鶴は
咄嗟に持っていた鍔板で狐を撲り
つけ狐は「モウコンコン」と鳴い
たと言うのはチト怪しいが兎に角
一散に逃げ失せた。所で矢張り駿
府宮ヶ崎町に政蔵という鋸職人が
居て同じく落語・昔噺等の達者で
安鶴とは大へん親密であつた。

狐を撲つた翌日の夕刻伝馬町に
庚申侍があり安鶴と政蔵は頼まれ
て例の八人芸等を演じ夜も更けて
いたので連れ立って帰り宮ヶ崎の
政蔵の家の前で別れた。その翌朝
安鶴が仕事に行く途中政蔵の所に
立寄るとその顔を見た女房のおし
んが急に大声をあげて座敷に駆け
込み蒲団を被つて泣きわめき出し
たので安鶴も政蔵も訳がわからず
驚く許りであつた。安鶴は唐木屋
に仕事に行き夕刻帰り途に又見舞
に顔を出すと一旦治まって居たお
しんが再び大騒をはじめると、
医者も精神異状と診断するのみで
手がつけられない状態が続いた。

安鶴の顔を見ると狂い出すとい
うので、さては彼とおしんとは何か
訳があつたその辺のもつれから精
神異状を来したのではないかと
う疑が出て、職人仲間内々調べ
たりして安鶴も大いに弱つたが、
もとよりその様な事実は無かつた
ので仲間も理解し、暫く政蔵の所
から遠ざかる事にした。

一年程して何となく様子を見に
立寄つた所それまで平静であつた
おしんが又狂い出した。いよいよ
何かあるというので政蔵がおしん
を問い詰め、訳を話さなければ離
縁すると追つた所「実は私は先年
呉服町で安鶴に打擲された狐であ
る。打擲された翌日仇を取る為
に安鶴に取り憑こうとしてつけ狙
つたが彼は勢の強い男で隙が無く、
夜中になつて帰つたので暫く此の
の前で別れて帰つたので暫く此の
家にとどまつて彼をつけ狙つて
いる次第でこの家に仇はいたしま
せん、どうぞ今迄通り夫婦仲睦ま
じくお願いします」と詫言つた。政
蔵は「それなら早々に立去れ。立
去れば祠を立ててやる」と言つ
た。

おしんもそれではと観念し暇を
告げて家を出た所、門口で忽ちた
おれてしまった。暫く失神してい
たおしんは正氣に戻り平常に復し

さて狐の話に戻りましょう。安
鶴在世記に「狐の証文のなし」

とあるが前記の著書によれば大
体次の様です。

おしんもそれではと観念し暇を
告げて家を出た所、門口で忽ちた
おれてしまった。暫く失神してい
たおしんは正氣に戻り平常に復し

一同喜んだが、三日程経って又おかしくなった。「命にかかわる様な目に合はされて黙って帰って来る様な奴は仲間に入れないと追い返された」と言うのである。

これは大変というので種々手を尽したが利かない。政蔵が刀を抜いて斬り殺すぞと威しても「斬るならお斬り、斬り殺されるのは女房の躰で我が体は外にある。そんな事を恐れる狐ではない」と居直る始末、どうすりゃ良いのだという事になると、「仇の安鶴を存分に打擲しなければ立去らぬ」と言うので相談の上打擲させる事になりおしんを伴って安鶴の家へ出かけた。ところが安西にかかってもう少しという処でおしんは急に立止って考え込んでしまい「相手が安鶴では仇討が返り討になってもつまらない。それより生涯猥類は決して打擲しないと有り証文が欲しい」と言い出した。止むなく引返し安鶴に頼む事になった。安鶴も自分のした事から政蔵が迷惑している事なので証文を書く事を快諾したが此の際相手の狐からも証文を取ろうという事になった。

証文取り交わしとなりおしんは無筆であるからと黒髪を切って差出したが黒髪は証文にならないと言はれ、安鶴の証文を読み聞かさ

れ遂に証文を達筆に書いたが署名がない。それは「まだ自分が四才の小僧で名等無い」と言うのであったが、仲に入った者に説得され「そのかわり誰にも見せてくれるな。見ればまたこの家に帰って来る」と念を押してから署名しその上に貼紙をして渡した。証文は次のようなものである。

安鶴の証文

一去、年九月十一日唐木屋普請場にて打擲仕候事あやまり入候乍然人者天地万物之靈也以来人につきたり候はば我一挙を以て汝等一類を打殺し可申候相候候はば決して打擲仕間敷候
以上

天保三辰年十月九日 鶴蔵 請人 華井昌齊

あさりやおしんどの

狐の証文

一、先年呉服町唐木屋裏にふと遊歩候処鶴様に打ちなやまされ痛く難儀に相および候間、無拠此戸に憑申候其後鶴様打申さず候はば速に帰穴可申候其上国府にて徘徊不申候

天保三辰年十月十日真九郎 安西五丁目重右エ門殿

註・請人華井昌齊は同町の医者で安鶴の師にあたる花野井

有年のこと。真九郎は勿論狐である。

おしんは安鶴の証文を受取ると指に確りくりつけて家を出て行った。暗い夜の事で一同が見送る中宮ヶ崎通り正面の奈古屋社樓門前の石橋の畔で一同に挨拶したかと思うと其場に倒れてしまった。間もなく正気に蘇ったおしんの指には証文が無くなって居り、その後おしんは狐憑きが落ちて平常に戻った、と言うお話。

この幕末時代には舟山の五郎左衛門、お竹狐等々狐の話が多く伝わった様で、この真九郎は美和村足久保の生れ、餌を漁り歩いて、服呉町四丁目と五丁目の間に入った小路、中之店(なかんたな、魚問屋のあった所)の橋の下を潜り抜けて呉服町裏を棲家としていたものという。

私達が子供であった昭和の初め頃にも「くだ狐」とか「くだ憑き」の話は、安鶴さんの話と共に巷間に語り継がれて居ましたが、私には狐の証文の話がどうして王子の狐に化けたのかという疑問が残ります。考えて見れば駿府という地は十返舎一九の出た所ではあるし安鶴が落語の名人であったとも言

うし、元来両者には何か関係があったのではないかとも思えます。

いずれ、呑気な時代のハイジャックならぬコンジャック物語なのでしよう。

短歌・俳句

村松 直 (42回)

オリオンの冴え通しける大空の
湯の里を空洞なして乱れ飛ぶ
桜吹雪に汲む原酒かな

大きな心^存噂ばしめんとてか
全身揺りて新春来たる
貨車の影氷田面を走る寒さかな
ジェット機や一会の空に冬晴るる

初節句吾児を抱きて交々^{かたかた}に
見つつあやせし遠き日の恋し
あなさやけお酔眼に芽麦かな

相模野はなびく霞の絶え間毎
桜を添えてとのぐもり居り
暖房になしまぬ宵よ妻恋し

畑中の丸木の橋に野の草の
病み抜いて歩を曳く門や露のとう
ままごとなせり姉弟ならむか

からかつたり ながられたり

「い」いびつ(歴)「う」うす(教)「え」(同)ちようた(英)「と」ところ(修公) エロわた(博)「お」おかべ(英)「お」 「ぬ」ぬまかん(地歴)ぬるはち(歴) おじょうさん(国漢)「か」かまきり 「ね」ねこ(音習国)「ひ」ひょうろく (博)かわろそ(体)がま(英)ガンジ (教)びくり(国漢)「ふ」ブラック ー(地修)「く」くろぼち(物化)ぐん (博)プーかん(物数)「ほ」ほんぼり ず(音作)「け」げた(数修)「こ」こっ (教)「ま」まんじゅう(数)「み」ミ びい(柔)「さ」サツク(体)「し」しゃ ット(歴)「も」もときっちゃん(国 もじ(音)しょんじい(教)ジャイア 漢)もっちい(同)「や」やもり(同) ント(数)「そ」ぞう(図)「た」だきへ 「り」りゅうせん(英)「他割愛) (数)「ち」ちいち(同)ちようせん ごめんなさい(59回 青木静男)

各
期
便
り

四八回

静中四十八期の集り、例に依つて福永君の顔で有楽町の日本倶楽部で、二月十八日に行いました。小生、日本の外に居る事が多くこの会には欠席が多いので、「今回はお前が報告を書け」との厳命を受け、恐懼して筆を執った次第です。

当日の参加者は青木（幼年学校中退）、伏見、福永、日比野、原崎、加藤（森）、数田、北村、工藤（菅原）、松岡、大橋、太田、佐々木（山本）、寺尾、八木（鈴木芳）、山崎、飯田（下山）、平岩の諸氏十八名。

この内でも青木、数田、北村、飯田は久しぶりとの事で話しの花が咲きました。

幹事さんから私自身の記事も書けと厳命を受けましたが「各期便り」と個人の記事を混同するのもおかしいので、私の記事は別の機会に譲る事したいと思います。

（平岩辰雄）

五一回

「自分の六十年の人生も、さしずめ、この庭のようなものであるかも知れないと思う。人間六十年も生きてしまうと、長い過去はすっかり荒れた庭園に化してしまふ。何もかもが、雑草の蔭にかくれたり、雑木の茂みに包まれたりしてしまつて、ほうほうたる同じような風景だけが、どこまでも伸びているだけである」少年の頃、伊豆に育った作家、井上靖氏の「花壇の冒頭に出てくる一節である。朝食のあと、煙草をくわえながら主人公が、自分の庭、その荒れはててしまった庭園にむかい合つての感想である。われわれ五一回生も、いづれこころ、二年の間に誰れもがこの六十才になるはずである。「六十年の人生」ということばが、いたく私の心につきささつた思いがして、むさぼり読んだのがつい先頃であった。続いて、もう少し氏の文章を引用してみる。「六十年の過去には得意の日も、失意の日もあった筈であるが、そ

れさえも雑草に覆われてしまつていると思う。実際に一番得意の日を拾い出そうと思つたが、拾い出せなかった。失意の日も同じであった。ただひたすら歩きづめに歩き、忙しく駆け廻つて生きて来たと思ふ。そして今初めて立ち停まつて、己が生きて来た過去を振り返つてみると、一望の雑草に覆われた道が続いているだけのことである」

味わいの深いことばである。なんとなくわが身にしてみる思いがする。大方の諸君もそうであろうと思ふ。さすがに、六十才の人間の心を、まことにうまくとらえている。しかし、又一面、私はこの主人公の「すっかり荒れはててしまった庭園には、庭園としてのなかなか捨て難いものがあると思う」というところに、なんとなく心にひっかかるすくいがあり、うれしさを感ずるのである。この雑草の庭園の中にも「堀の際は雑木の緑で埋められており——」とある。この主人公には、じゃまものではないこの緑こそ、青春のなごりであり、若き日の思い出と解しては無理であろうか。それこそ、今から約四十年前以上前の静中時代・静岡の生活を色どるものであると思うことは許されないであろう

か。そして、この緑は、この庭園のある限り永遠になくならない青春であると信じたのである。永久に消えることのない懐しさであるとも祈りたいのである。

私達の五一回のつどいは、この緑であり実に楽しいものである。東京五一回もあるので皆つとめて出席しているようであるが、このところ、集る機会が少なかった。

幸い昨年末、久しぶりにせっかくの会合があつたのに、私は下手なゴルフの帰りがおかれて出席出来なかつた。東京在任の約過半がつどい実に愉快であつた由。私としては誠に残念。しかし、これは横の会である。幸い最近はこの縦の会が活発化して来たことは、それ自体、又、私達の横の会を發展させる意味からも、極めて意義あることと思ふ。五一回の面々も、この縦横の鞆帯を強化、密にして、ともに過去の緑を永久に維持し育てていきたい思いは皆同じであると信じている。

最後にもう一度、あの人生の雑草の庭園を眺めてみよう。われわれ五一回生ほど、この過去の雑草の道に、日本の、そして時代の濃い影・運命を深く背負つて来たものは少いと思ふ。私達は、それぞれ、大へんな歴史的宿命の下に生

き抜いて来た。しかし歴史というものには常に現代に生き、かつ未来を規制するものである。五一回が今日、固い横の結束を誇れるのも実は、歴史の中の一駒にすぎないのかもしれない。縦のつながりこそ、長い貴重な歴史であり、明日の世代の発展へとつながるものである。その意味で、私達は、単なる若き日の想い出ということ以上、希望と祈りをこめて、この縦の会、即ち「静岡静高関東同窓会」のますますの発展とご成長をお祈りしたい心で一ぱいである。

（森 弘）

五二回

母校は御承知の通り明五三年は創立百周年、我々五二期は本年度丁度卒業四〇周年、そろそろ還暦に手のとどく頃になったが、皆さん元気で活躍の様で何より。

さて、かねてから懸案となつていた在京同期会も数年ぶりで昨年十一月二十六日、有楽町国際ビルレストラン「ヨードル」で開催したが、その模様を報告したいと思ふ。通知を出した者三八名、出席者一九名、此れに静岡より川野辺ドクターの参加を得て二〇名となり、定刻一八時をやや過ぎた頃、直原の開会の挨拶で始まる。

川野辺ドクターより創立百年に
向けての募金活動に関する事を主
体とした報告及び協力方の呼びか
けがあった。具体的には本年半ば
頃には決定される筈であるので、
その際は何分の御協力を。
さて、我々の仲間の中の幾人か
は最近新しい分野に転進して活躍
しているの、その人達の激励も
かねた此の会合も、宴酣となるや
すっかり中学時代の悪童に戻って
の懐旧談に、第二の人生の活躍談
議、欠席した友の消息に、話題は
はずむ。毎年地元静岡で行われる
同期会に出席している人とは一年
ぶり位であるが、関口（川崎市役
所）、石野（防衛弘済会）、弓削
（防衛庁）、松永（日本ゼオン）
等とは何年ぶりか。毎年の静岡の
会合時もそうだが、今回も、遠く
北海道より苫米地（アサヒレキセ
イ）が巨体をゆすって駆けつけて
くれた。数時間の、又久方ぶりの
此の会合も、漸く昔の記憶が甦っ
た頃には、早やお開きの時間とな
り、やむなく次回の設営幹事に石
野、弓削両君を指名し散会した。

当日の出席者（敬称略）

綾部、岩本、石野、今井（旧姓松
村）、太田、一、樽松、坂本、佐
藤（昌）、関口、薦沢、苫米地、
新美、松永、服部（雅）、広川、
弓削、川野辺、曾根、直原。
（直原澄衛）

五三回

五三回の皆さん御無沙汰して居
ります。昨年ついに同級会が不発
に終ってしまつて申し訳ない次第で
す。幹事の私達が関東支部の方で
追ひ廻されていたせいもあるの
ですが、何とか改善の必要があると
反省して居ます。

ところで、仲間の諸君に異動が
少しあります。畔柳藤男君が大同
スブラグ（株）の常務に就任、愛知県
から東京に出て来ました。大石巖
君は新日本証券で副社長に就任、
その他、年頃でもあるので、勤め
先の異動と住所の異動が数件あり
ますから名簿に御注意下さい。

尚、山菅章雄（旧姓名村松正七）
君は昨年秋季以来、自宅で川根茶の
販売を始めて居ります。諸兄の応
援で商売繁昌と行きたいもの。何
卒宜敷く御願います。

今年の同級会は近々計画するつ

もりです。奮って御出席下さい。

（月見里得郎）

五四回

関東五四季会は肝腎の会合をも
たないので、ニュースが無いため
いつも私見に互つて恐縮だが、朝
報は永原君が衆議院議員に当選さ
れて我が関東同窓会へ入られたこ
とだ。名簿を見れば分るが、月曜
日から金曜日までは第二議員会館
に居られるとの由、公務に差障り
のない限り、旧交をあたため、彼
の活躍を激励してやつてほしい。

そろそろ停年になる時期で、退
職した者や、これまでの職場を変
った友達が出てきたことをチラホ
ラ聞く。閑職になれば、また昔の
「おれ、おまえ」のつきあいが蘇
るだろうし、新しい職場になれば
変わった話題に花を咲かせるだろ
うことを楽しみにしている。

（庵原倅次）

五六回

東京五十六期会今回は今回は中村君
を中心とし、成田・奥野が世話人
となり、再々打合せの上、中村君
の日本輸出入銀行青山寮にて十一
月十七日午後六時より開催した。

中学卒業以来三十六年、かつて
の紅顔の悪童達もいつの間にか

五十路を越え、本来なら社会的地
位も固まり穏やかな時期にあらう
が、折悪しく三年來の不況の最中
で責任ある立場だけに皆それぞれ
苦勞のあとがなんとなく白髪に偲
ばれる年頃になってしまった。
定刻には、それぞれ懐しい姿が
ヤアヤアと片手を挙げつつ次々に
入場、肩を抱き手を握り拍手喚声
の中に開会。それぞれの現況報告
も飲む程に酔う程に脱線気味と相
成り、懐古談から第二人生論、子
供の入学、就職の内輪話、はては
娘の嫁入あっせん依頼等、話題は
果てしなくエスカレート、途中、
沼津より態々佐々木俊夫兄が馳せ
参じ益々会
を極め夜の
更けるのを
知らず最盛
後の校歌合
唱も高らか
に同期会の
楽しい一夜
を閉じた次
第である。



出席者二
十名、記念
写真により
昔の少年の
変身振り
（よくみれ
ば少しひね
てはいるが
変らない）
を紹介する
と、
最前列右よ
り小坂、横
森、三枝、

八百、橋本、植田、荻原(仁)、二列目松田、石塚、山田、奥野、佐野、原、佐々木
 最後列松田一郎、中村、篠原、川崎、牧大(北原)、成田(早退)
 猶、原田昇左右(今回衆議員当選)鈴木辰衛、大庭、青木その他諸兄より連絡あり、健在の様子、皆様によりしくとの事、一応御報告します。
 (奥野 進)

五七回

懐い返して見ますと、昭和十七年霊峰富士を背にして、駿河路を跡に、ばらばらに巣立ってしまったから三十五年の歳月が流れ去って再び五十面をひっさげてハナ垂小僧に逆戻り、語り合い、助け合い、一献を傾けながら旧情を温め合える席を得る事、誠に生きる喜びであると思われれます。
 さて、関東支部に属する五七期の同志は、一応五十二名を数えますが、昭和五十一年度は二回の会合の席を持ちまして、四月に八重洲口ザクロに二十四名出席、亦十月には銀座吉田そばの二階で二十名名の出席、いやはや、うふあうふあとよく飲むは、喰うは、喋べくるは、あげくの果ては二次会、三次会、青年顔負けのタフな小父様の多い事、亦、東京駅周辺に私

を含め七名程、賑やかなるさい奴が屯ろして居ります関係上、ミニ会合は年中行事で、がぶがぶ、むしゃむしゃ、ジャラジャラ、まづここ数年の憎まれ子世にはびこるとか、香典の心配は無さそうです。今年の二月の同窓の麻雀大会を青山のサンで行い、五十七期〇君(日本レーベル)が、見事優勝を勝ち得ました。

中学時代の同期会の一番の魅力は、如何なる会合よりも、社会的な地位の上下が全く消え失せて、まる裸な遠い昔の十代に戻ってしまふ事だと思えます。

卒業後、各人様々な違った職業の道を歩き、友に無いその特技がその友の人生に大いなる力になる事を望みます。

今年も近々に同期会の席を段取いたし度存じますので、奮って多数の御参加を希望致します。

ここで一言、出席の通知を出されて御都合で出席の出来ない方は是非御連絡を戴き度、毎度その会費が幹事の負担になりますのでよろしくお願い申し上げます。
 来る五月七日熱海ホテル西山での同期会に、家族写真集に続き、同志の文集が出来上った由、大いに楽しみにして居ります。
 では亦、逢う日を夢見て。

六七回

(堀江隼人)

いつもながらびっくりしてしまふ。ゴルフ大会・麻雀大会・釣の会、それに関東支部の幹事会。静中静高同窓会関東支部の連絡ももらうたびに、幹事さんのお骨折りに頭がさがる。私も同窓会から幹事の一人に選ばれているのだが、いつも仕事との折り合いがつかずほとんどお手伝いできなくて申し訳ないと思っている。それにしてもこんなに活発な活動をしている同窓会は全国にも少ないのではなからうか。

われわれ六七回は、ほかの期の諸兄と比べて特に同窓会活動が盛んだというわけではないだろうがそれでもまあまとまりがいい方だと思っている。それというのも、朝比奈正三、梶原由三、塩沢俊、成岡英彦らの面倒みのいい諸君がそろっているからである。このほかにも、飯田博君がこの会報の編集に協力し、芸大出の中村次雄君が会報表紙のデザインなどを手がけている。

ことしも年に一回の在京六七期会が、二月二十六日に新宿西口の「今佐」で開かれた。集まったのは約二十五人。同窓会名簿による

と、関東支部会員は東京を中心に約七十五人なので、三分の一が顔をみせたことになる。静岡からも桜井昌三君がかけつけて、静中創立百年の、それも特に野球部の百年記念甲子園優勝大作戦について話してくれた。

われわれもことし四十五歳、不況下の企業にあってはその中堅であり、家にあつては子どもの高校進学問題や親の高齢化に頭を痛めている。しかし、それでもまだ飲めば意気軒昂としており、恒例の静中校歌「岳南健児」を合唱したころには、すっかり三十年前の少年にもどっていた。

(大石脩而)

八一回

八一回という今年は、三十才又は三十一才である。「人生、三十にして立つ」というが、果して私は、自らの人生指針に基いて、社会に自らの足で立っているのだろうか。

困の人々の気ままな言動、そして社会のムードに押し流され、あまり行き当りばったりの人生を送り続けてきたことを強烈に反省せざるを得ない。

この三月に、突然、父が病死した。父は常々、私に「父の目から見た息子の人生の生き方」を語っていた。しかし生前は、その父の教えの重みを、今考えると理解していなかった。これは父に対し親不孝であったと後悔している。死後、やっと、父が今まで実社会の波から家族を保護してきた防波堤が崩れ、私がいかに肌で実社会と接するようになった時、父の教えの意味を理解し始めた感じがする。

人生はやはり、自らの目で見、耳で聞き、肌で感じないと、自分がどう生きるべきかが実感として固まらないと思われる。

そして人生は、社会の中で自らを生かすには何をしたいという志が決まったなら、「初志貫徹すべし」「一つのテーマを追求すべし」だと思ひ、それでこそ人生の真味がわかるのではないだろうか。

最近、八一回の同期の無二の親友と会って以上のようなことを語り合った。

親友とは、悩みを打ち明け、人間の心の奥深くで共鳴していき

い。この同窓会も、上滑りのつき合いでなく、心の底で響く関係に

なることを心から希望している。(竹内尚興)



第一回麻雀大会

昭和五十二年二月十九日、東京青山の雀荘「サン」に於いて、石割長老を筆頭に精鋭二十八名が優勝を目指して技を競い合った。役満こそなかったが倍満ハネ満の応しゅうに戦局は二転三転、混沌として、もつれ合い、手に汗握る激戦の末、優勝は小幡氏(57回)の手に落ち、準優勝は溝口氏(67回)のさらうところとなった。会費は二千元であったが、酒肴のもてなしや会長賞・委員長賞など盛沢山な景品が全員に配られ一同大満悦で一日を終った。(庵原記)

第二回ゴルフ大会

老雄岩波信平氏(42回)優勝

去る3月17日、第二回印高会ゴルフコンペが裾野市東名カントリークラブで行なわれました。当日は生憎の雨天にも拘らず、

四月十日日曜日に新しい試みと

新宿御苑

観桜会のつどい

四月十日日曜日に新しい試みと

(奥野記)

して新宿御苑で桜花を觀賞し乍ら雑談を交す集いを行った。

当日は柳川副会長を始め岩崎、荻原氏(42期)他十一名の会員と柳川氏の御家族七名、酒井氏(57期)の奥様も参加された。

今年の冬の厳しさから四月十日頃が染井吉野桜の観頃ではないかと思つて居った処、三月中旬から急に暖かになり、残念乍ら染井吉野桜は殆んど散つて居り、八重桜は未だ蕾と言う処で、観桜会としては空振りの様な結果となった。

然し乍ら、うららかな風のない良い天氣に恵れ、若芽の香る中で十時半頃より午後三時過迄楽しいのんびりした時間をお互いに持てた事は、それなりに有意義な一日であったと思う。

私も二十数年振りに御苑を訪れたのだが、こんな機会でもないと思ふ。私を訪れることもないと思ふ。一応禁酒にはなつて居たが、皆様が持ち込んだ手料理を着に、酒をチビリチビリとやり乍ら、芝生の上でいろいろ雑談を交すうちに、青木君(59期)が隣の民謡踊りのサークルの中に入って手振よろしく踊る姿は仲々見事なものであった。

来年は満開の桜の下で尚一層盛りあがった観桜会を是非やりたいものである。

詳細別掲

三月一七日 第二回ゴルフ大会

印刷所 庵原印刷所

その後の支部活動

○五一年一月九日 幹事会
幹事三七名が集まり主として新年顧問会・春の行事・総会・会報等の五二年度計画を審議した。

意見として同窓会本部支部の名称に関する総会提案の実施促進が提出され、関東支部の別名称を作る案を検討する事になった。又、関東同窓会サロン設置案が提案された。

○五二年一月二八日 顧問会
日比谷東商會館に顧問幹事約六十名が集まり、新年度事業予定、百周年記念事業計画、野球部の甲子園優勝旗レプリカの再交付運動等の報告があり、賑やかに懇親会を行なった。

○二月一九日 第一回麻雀大会
詳細別掲
○三月三日 幹事会
トッパンムーア未来開発室で開催。百周年記念事業関係、会報名簿関係の報告があり、総会の新企業事務局から提案された。

又、中村氏(67回)の労作である同窓会手拭の図案が披露され、ゴルフ大会観桜会の予定が発表された。

三月一七日 第二回ゴルフ大会

印刷所 庵原印刷所

○五月六日 幹事会
前回同様、約四十名が集まり、五一年度会計報告及び五二年度事業計画同予算の概略案、総会実行計画が審議され、百周年記念事業の進行近況報告、会報・名簿作成の状況報告があった。

意見として支部名称及び会報名称の決定促進が強く打出された。

編集後記

皆様のお力添えのお蔭で先号は好評を頂いた由、編集作業をした時の疲れも一返に吹き飛んで又々大張切りでとりかかりました。

今回も実に多くの然も実に良い原稿を頂きましたので御好評の先号と同じ形としました。

更に、臆を得て蜀を望むとすれば、この会報が読物としてだけでなく何かの形で対話としての役目が持てないものか等と夢を画いたりします。

今回も庵原(54)、青木(59)飯田(67)、上田(79)の委員諸氏の御芳苦に感謝します。

会報(第三号)

昭和52年6月3日 発行

編集人 月見里得知郎

発行所 静中・静高

印刷所 庵原印刷所

昭和52年度 事業計画

1. 総 会 年 1 回
2. 顧 問 会 年 1 ~ 2 回
3. 幹 事 会 年 5 回 位
顧問会と幹事会は合同でやる場合もあります。
4. 会報の発行 年 2 回 (6月・11月発行)
5. 52年度 名簿編纂発行 (6月発行)
6. 懇 親 会 ゴルフ大会 (年2回)、麻雀大会 (年1回)
釣り大会、ハイキング大会 (年1回) 等

昭和52年度 静中・静高関東同窓会 (案)

(S 52.4.1—S 53.3.31)

I 収 入

年 会 費	2,000円×900人	1,800,000円
広 告 収 入		700,000円
計		2,500,000円

II 支 出

会 議 費	1,000円×(50人×5回)	250,000円
会報発行費	(1,900部×2回)×120円	456,000円
郵 送 費		690,000円
印 刷 費		200,000円
名簿印刷費	280円×2,000	560,000円
通 信 費	電話3,000×12 弔電 10,000円	46,000円
写 真 費		12,000円
事務用品費		10,000円
人 件 費	名簿・会報発送他アルバイト料	60,000円
交 通 費		50,000円
雑 費		10,000円
予 備 費		106,000円
交 際 費	祝儀他	50,000円
計		2,500,000円

昭和51年度 静中・静高関東同窓会決算書

(S 51.4.1~S 52.3.31)

I	収 入		
	50年度繰越金		619,690円
	// 年会費		38,000円
	// 名簿売上		2,000円
	51年度年会費		1,753,300円
	// 広告収入		390,000円
	寄付金		48,000円
	計		2,850,990円
II	支 出		
	会 報		488,340円
	名 簿		416,500円
	郵 送 費 (払込手数料共)		697,570円
	印 刷 費		204,605円
	交 際 費 (支部総会祝儀他)		47,311円
	交 通 費		45,960円
	人 件 費 (アルバイト料)		50,000円
	事務用品費		2,350円
	通 信 費 (弔電)		740円
	記 念 品 代 (楯・ネームプレート)		177,600円
	写 真 代		11,200円
	レクリエーション助成金		92,032円
	会 合 補 助 費 (新年会・幹事会等)		276,145円
	総 会 補 助 費		54,600円
	雑 費		9,200円
	計		2,574,153円
III	残 高 (次年度繰越)		276,837円

◇記念品の楯の在庫 …………… 93ヶ

上記監査の結果適正であることを認めます。

昭和52年5月6日

監 事	村 松	直
監 事	村 井	東 助

同窓会コンペなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ 伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石橋 正秋
取締役支配人 安田 正弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198-1
TEL 0558-76-2401 (代表)

ギンガ印スポーツ用品総発売元

株式会社 北村スポーツ

常務取締役 川上 剛二 (67回)

東京都中央区東日本橋2-10-3
TEL 03-863-2931 (代表)

宝石直輸入元

株式会社 貴信貿易

代表取締役 土屋 博 (67回)

東京都台東区上野5-18-4
ダイヤオフィス6階
TEL 03-835-3785 (代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原 由三 (67回)

東京都中央区八丁堀2-1-7
神鋼ビル
TEL 03-553-8981 (代表)

建築設計・管理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成岡 英彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-1-9 規格ビル
TEL 03-363-8604 (代表)

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役 朝比奈 正三 (67回)

東京都中央区銀座1-15-6 銀座NSビル4階
TEL 03-563-1921 (代表)
米国事業部
イリノイ州シカゴ市ウエストスクール街2031
ジャパンビジネスサービス社内

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥野 孝 (53回)
取締役社長 奥野 進 (56回)
取締役副社長 吉川 善吉 (56回)

本社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル
TEL 03-842-6831 (代表)
静岡事務所 静岡市安東2-8-14
TEL 0542-46-9378

建築コンサルタント・設計施工業務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長 奥野 孝 (53回)
取締役営業部 奥野 広 (58回)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03-834-5331 (代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

ねつ かん 熱 函 病 院

院長 小坂 博 (67回)

住所 熱海市春日町12-2
TEL 0557-83-3131

店舗内外装工事
店頭広告全般

東洋テルミー株式会社

営業部長 塩沢 俊 (67回)

東京都中央区日本橋浜町2-9-5
TEL 03-667-7551 (代表)

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮 沢 次 郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2 4 1 1 (大代表)

鈴 与 株 式 会 社

取締役会長 鈴 木 与 平 (44回)

清水市入船町3丁目12
TEL (0543) 53-3111 (大代表)

株式会社 講 談 社

取締役社長 野 間 省 一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945) 1 1 1 1 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2 1 1 1 (大代表)

保険代理業 (特別総合代理店)

株式会社 京 華 商 会

取締役社長 岡 本 敏 興 (32回)
専務取締役 今 関 智 吉 (47回)

本店 東京都千代田区大手町2-2-1 TEL (241)7751
分室 東京都千代田区丸ノ内3-3-1 TEL (211)7831
大阪支店 大阪市東区淡路町1-12 昭栄ビル内
TEL 06-201-3 2 2 4

株式会社 東 電 社

取締役社長 岩 波 信 平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2 7 0 1 (大代表)

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀 豪 三 (44回)

東京都中央区銀座6-2 合同ビル
TEL (571) 8 6 4 1 (大代表)

本田技研工業株式会社

取締役副社長 川 島 喜 八 郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0 1 1 1 (大代表)

新日本証券株式会社

取締役副社長 大 石 巖 (53回)

東京都中央区日本橋1-17-10
TEL (273) 2 3 1 1 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩 井 平 一 郎 (57回)

本 社 静岡市国吉田645
TEL 0542 (62) 1 1 1 1 (代)
東 京 中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03 (272) 4 6 5 1 (代)